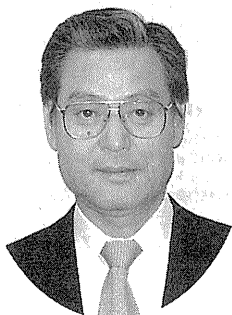


ずいそう



単身赴任

安 齊 利 昭

残暑厳しい8月1日、羽田を発ち千歳空港に降り立った。関東と違い寒さを感じるぐらいの気温に先ず驚かされた。この年、北海道は冷夏で関東と温度差が10度以上もあったほどである。

入社以来現場一筋で24年間、初めての内勤、初めての単身赴任ということで馴染のないこと尽くめであったが、不安というよりは未知への好奇心的なものを感じたことを記憶している。札幌支店への転勤が決まった時には、周りからはサッチョン俗は最高だといわれ俗っぽくそんなに良いとこなのかと思う反面、身体でも壊したら何を言われるか分からないなと感じたものである。それと同時に入社して30代前半に椎間板ヘルニアを患い2ヵ月半も入院生活をしたときのことを思い出し、これは自己管理を今まで以上にやらなければと己に言い聞かせ、単身赴任の5か条なるものを作ったことを懐かしく思っている。

〔単身赴任の5か条〕

1. 外食は極力しない。
2. 朝食は自分で作る。
3. 外での酒は極力控える。
4. 地元で馴染み、楽しむ。
5. 観て歩きの励行

単身赴任生活の初めに当たり、情けない話ではあるが家内の同行を得て生活用品の買出しをし、生活を始めたわけであるが、通常は特に不便さを感じることなく単身生活を過ごすことが出来た。

北海道は当社にとっても長い歴史があり、明治13年に大倉組の時代に現在の月形町で樺戸集治監工事を手がけたのが始めである。その後、110年以上に渡って国土の22%を占める北海道の道路、鉄道、港湾等のインフラ事業等に貢献してきた地である。諸先輩の多大なる功績を残した地に赴任できたことの重みを感じた。

着任して先ず感じたのは、関東近辺の現場を手がけてきた私にとって、物件当たりの工事規模の違いに逆カルチャーショックを受け、ある面地方の厳しさを感じた思いであった。

赴任後特に印象に残った出来事として、釧路沖・釧路東方沖及び南西沖地震の3つの地震が約2年弱の間に起こったことである。このうち南西沖地震は被害総額約1,000億円、死者行方不明者合わせて219名という大きな災害となった。地震後奥尻島へ行き、災害の大きさにただ驚くばかりであった。なかでも青葉地区の津波による被害状況は目を見張るものがあり、地区の住宅が1つ残らず流された光景を目の当たりにして、自然の怖さを痛感させられた。

赴任した時期が夏場ということもあり、まさにゴルフシーズン真っ最中で、こちらではゴルフはスループレイとなっており、休日は午前中にゴルフをして、午後は家庭サービス、買い物等をするのが常である。非常に合理的な休日をご過ごせるのでなかなか良いと思ったものである。ただし、こちらではゴルフは大体5月から10月の6ヶ月間しかプレーが出来ないため、シーズンになると待ちに待ったプレーヤーがこの時とばかりにゴルフ三昧になるようで、半年で少ない人でも30回程度はゴルフをするようである。斯言う小生もご多分にもれず避暑地の心地よいプレーを人並みの回数をこなした次第であった。

赴任最初の冬を迎えたある日、夜中に40度近い高熱で目が覚め、葉はなくまたアイスノンのものもなく息苦しく辛い夜となってしまった。冷気を入れようと窓を開けると積もった雪が目に入り、ビニール袋で即席の雪枕を作りなんとか急場をしのいだことがあった。後で考えてみると、冬場は寮が一晩中集中暖房となっているため、部屋が乾燥していたため風邪をこじらしたようである。それからは部屋に濡れタオルをかけて対応したためか2度と繰り返すことはなくなった。慣れない土地でのちょっとした経験であった。

そんな冬ではあるが、この時期はまさにスキーヤーにとって最高の季節でもある。折角の北海道赴任でこのスキーを経験しない手はないと一念発起し、同じ転勤者仲間の誘いもあり、50の手習いではないが札幌市内にある荒井山スキースクールの夜間コースに通うようになった。仕事を終わってからの練習であったが、転んだら起き上がれない私を始めとしたスキー仲間がお互い切磋琢磨して練習に励み、休みには先生同伴でゲレンデに出るの特訓を受け、シーズン終わりには仲間全員が3級試験に合格、翌シーズンには2級を取得するまでになった。シーズン終わりの滑り納めの中山スキー場でのバーベキューで食べた行者ニンニクの味、北海道の自然を満喫できるスキーを経験できたことは私のサッチョン生活の中で一番の思い出となった。

「単身赴任」、サラリーマンの宿命的な一面を響かせる言葉も、人との出会い、環境への同化、食文化への触れ合い、日常生活等を通じて、家族への感謝の気持ち、人間形成への一助となる貴重な体験であったと、懐かしく思う今日この頃である。